Vol.20
2024年
春夏秋冬号
（最終号）

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
（CEL 弘本由香里、B-train 橋本護・小倉昌美）
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html
発行：大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）
※U-CoRo＝ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
問合せ先：tel.06-6205-3518（担当：CEL 弘本）

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地　今昔タイムズ」を制作いたしました。

雑誌『上方』を編集・発行した上方・大阪の郷土研究のパイオニア

南木芳太郎

（なんき よしたろう、1882-1945）

明治時代生まれの大阪出身の郷土史家。号は萍水（ひょうすい）。船場の薬種商に勤めるかたわら、郷土資料を綿密に収集。上方郷土研究会を創立し、数え50歳の1931（昭和6）年1月に機関誌『郷土研究上方』を創刊。1944（昭和19）年の151号まで刊行した。近世・近代の大阪の庶民の生活資料を集めた「南木コレクション」が大阪城天守閣に残る。1945（昭和20）年10月21日死去（享年64歳）。

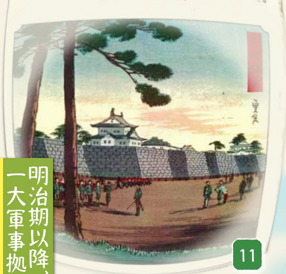
南木芳太郎、1932年12月17日、上方郷土研究会行事「更正二〇加」、北陽演舞場前に立つ
（提供：南木ドナルドヨシロウ氏）

その眺め、上町台地曼荼羅さながら
『上方』に刻まれた、
まちの相貌と魂を次代へ

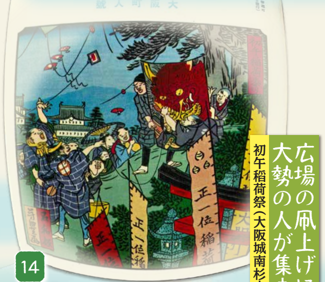
南木芳太郎の念願の結晶、大阪が誇る『郷土研究 上方』。1931（昭和6）年から1944（昭和19）年にかけて、151号を発行。陰影鮮やかな木版画の表紙絵は、大阪を中心に上方の折々の風物、記録に留めたい風景を描いて人気を集めました。なかでも、上町台地界隈ならではの眺め、名所旧跡や年中行事、時に災害や復興の様子まで描き伝えているものは、27点ほどを数えます。並べてみれば、上町台地曼荼羅とでも呼びたくなる、魂の籠ったまちの相貌が立ち現れます。

さて、2013年秋に第1号を発行した「上町台地 今昔タイムズ」は、2024年3月発行の本号（vol.20）が最終号となります。10年余に渡った編集ワークの中で、地域の皆様の貴重な記憶とともに、かけがえのない“知”の源泉となったのが、『上方』でした。感謝と敬意を込めて、その“知”を次代へとつなぐ橋渡しとなることを願って、「上町台地 今昔タイムズ」の最終号を編みお届けします。

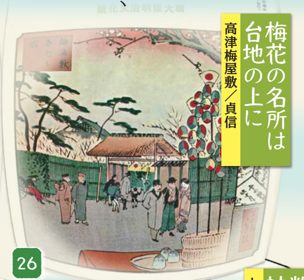
00は、通巻の号数。00は、表紙絵が上町台地に関係する号数。内面のマップに場所をプロット。



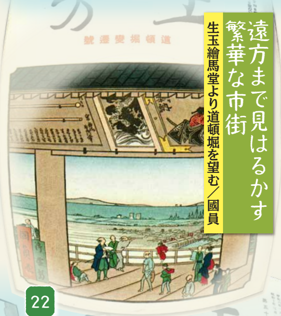
11
第11号　大阪城研究号
（1931年）
明治期以降、大阪城内は一大軍事拠点に
大鎮臺（大阪城）／貞信



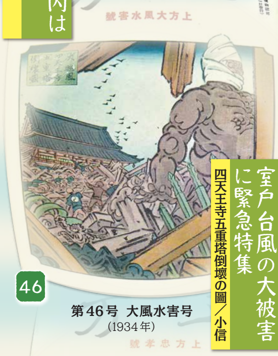
14
第14号　大阪町人号
（1932年）
広場の凧上げに大勢の人が集まった
初午稲荷祭（大阪城南杉山）／芳豊



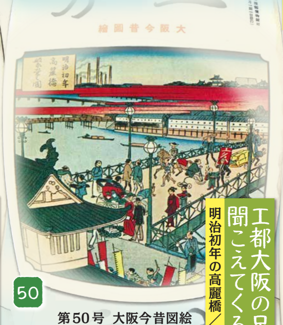
26
第26号　続明治文化号
（1933年）
梅花の名所は台地の上に
高津梅屋敷／貞信



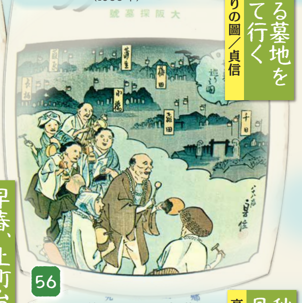
22
第22号　道頓堀変遷号
（1932年）
遠方まで見はるかす繁華な市街
生玉繪馬堂より道頓堀を望む／國員



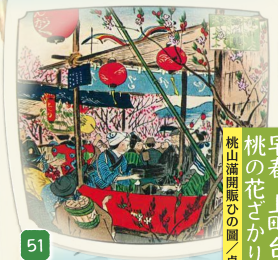
46
第46号　大風水害号
（1934年）
室戸台風の大被害に緊急特集
四天王寺五重塔倒壊の圖／小信



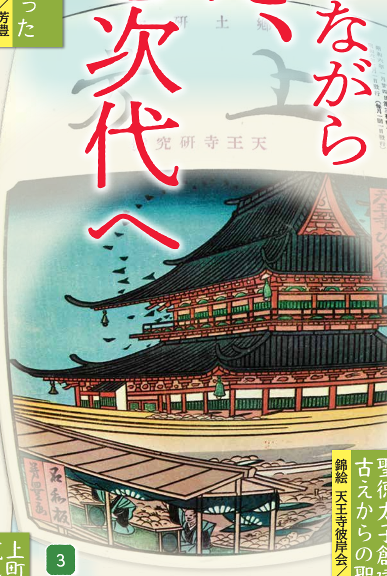
50
第50号　大阪今昔図絵
（1935年）
工都大阪の足音も聞こえてくる
明治初年の高麗橋／貞信



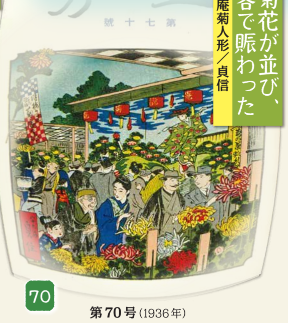
56
第56号　大阪探墓号
（1935年）
数ある墓地を訪ねて行く
七墓巡りの圖／貞信



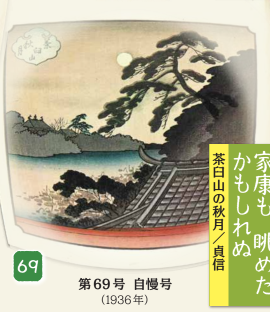
51
第51号　続大阪今昔図絵
（1935年）
早春、上町台地は桃の花ざかり
桃山滿開賑ひの圖／貞信



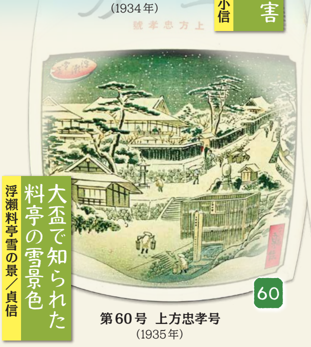
3
第3号　天王寺研究号（1931年）
聖徳太子創建の古えからの聖地
錦絵　天王寺彼岸会／芳豊



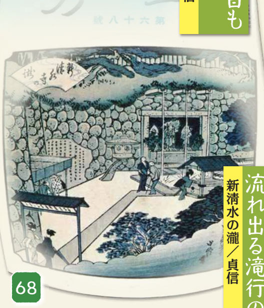
70
第70号（1936年）
秋は菊花が並び、見物客で賑わった
高津翫菊庵菊人形／貞信



69
第69号　自慢号
（1936年）
家康も、眺めたかもしれぬ
茶臼山の秋月／貞信



60
第60号　上方忠孝号
（1935年）
大盃で知られた料亭の雪景色
浮瀬料亭雪の景／貞信



68
第68号（1936年）
上町台地の水が流れ出る滝行の場
新清水の瀧／貞信

雑誌『上方』の表紙

上方の名所や行事・風俗などを描いた多色刷りの木版画を1枚ずつ貼った。主な作者は、大阪の浮世絵師、長谷川貞信（二代目、三代目）で、二代目貞信は子の小信とともにその大半を担当。1940年、二代目の没後、小信が三代目を襲名した。

カミガタ＋1・0（プラスワン）

橋爪節也（大阪大学名誉教授）

『郷土研究 上方』が、新しい好奇心を呼びさまし、いまも鮮度を保つ理由はいくつもある。

創刊の背景には1925（大正14）年の「大大阪」誕生があった。都市計画で街が変貌し、大阪の文化は否定されはしないか。その危機感が『上方』をはじめ『難波津』（1924・大正13年）、『郷土趣味 大阪人』（1929・昭和4年）などを生んだ。マイナスの感情がプラスのエナジー…energyに転じたのである。

『上方』創刊号で南木は、「亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、敗残せる上方芸術、その一歩々々薄れ行く影を眺めて、私は常に愛惜の情に堪へません。滅びゆくものは時の勢として如何とも致方ないが、せめて保存に努めたい、そして記録に留めて置きたい、これが私の念願でした」とする。

令和の時代に置きかえてはどうだろうか。知らないうちに、大阪の大切な何かが滅んでいないか。現代は紙の出版が厳しい状況だが、梅田の大型書店では『東京人』が並べられているのに『大阪人』は休刊したままだ。大阪人はどこにいてはりますの？ 南木なら「亡びゆく大阪の出版文化、敗残せる大阪人」とぼやいたかも。

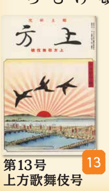
しかし、最近は歴史や文学、美術、芸能などに関心のある人たちがブログを開き、大阪についても語っている。南木は私財をなげうったが、インターネットで家が傾くことはないだろう。大阪情報は圧倒的に増えている。ただし、ネットでは正しい情報か、フェイクかよく分からないことがある。『上方』の場合、上方郷土研究会での切磋琢磨が反映され、いまさらながらメディアリテラシーが大切である。

『上方』の魅力にふれるならば、これまで私は、特定のテーマを調べる目的でこの雑誌を検索していたが、今は各号の特集の推移、南木を中心とした上方郷土研究会の興味の所在について興味がわいている。論文の渉猟は自分の専門分野に限られがちで、この雑誌に本来ただよう先人たちの総合的な文化芸術への思いを見失っていたことに気づいたのである。各号の特集の選択や構成など編集のあり方そのものも、知的な栄養価の高い、楽しみ味わうべき対象だろう。

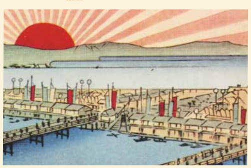
また『上方』は学術性とともに趣味性も重視する。表紙が大阪の浮世絵師である長谷川小信らによる木版画貼り付けであるのが、こだわりを象徴する。

たとえば幕末の「浪花百景」にある「三大橋」は大坂城や上町台地、生駒の山並みを背景に、大砲を牽いて長州征伐に向かう幕府軍が難波橋をわたる。この絵は同じ長州征伐を描いた歌川国貞の「末広五十三次」の「日本橋」が原型で、日本橋を進む幕府軍の背景に江戸城と富士山が描かれる。

しかし、瑞兆の鶴が三羽飛ぶ「日本橋」に対し、「三大橋」は朝日のなかをカラスが飛ぶ。「三千世界の鳥を殺し、ぬしと朝寝がしてみたい」の明けがらすである。それをさらに『上方』歌舞伎号13の表紙では「道頓堀春之賑ひ」と題して川を道頓堀に変えてしまう。明けがらすが飛ぶなら道頓堀がふさわしい。こんな仕掛けが隠された『上方』は、現代でも新しいアイディアに富んで、知らないのはもったいないのである。



第13号
上方歌舞伎号
13



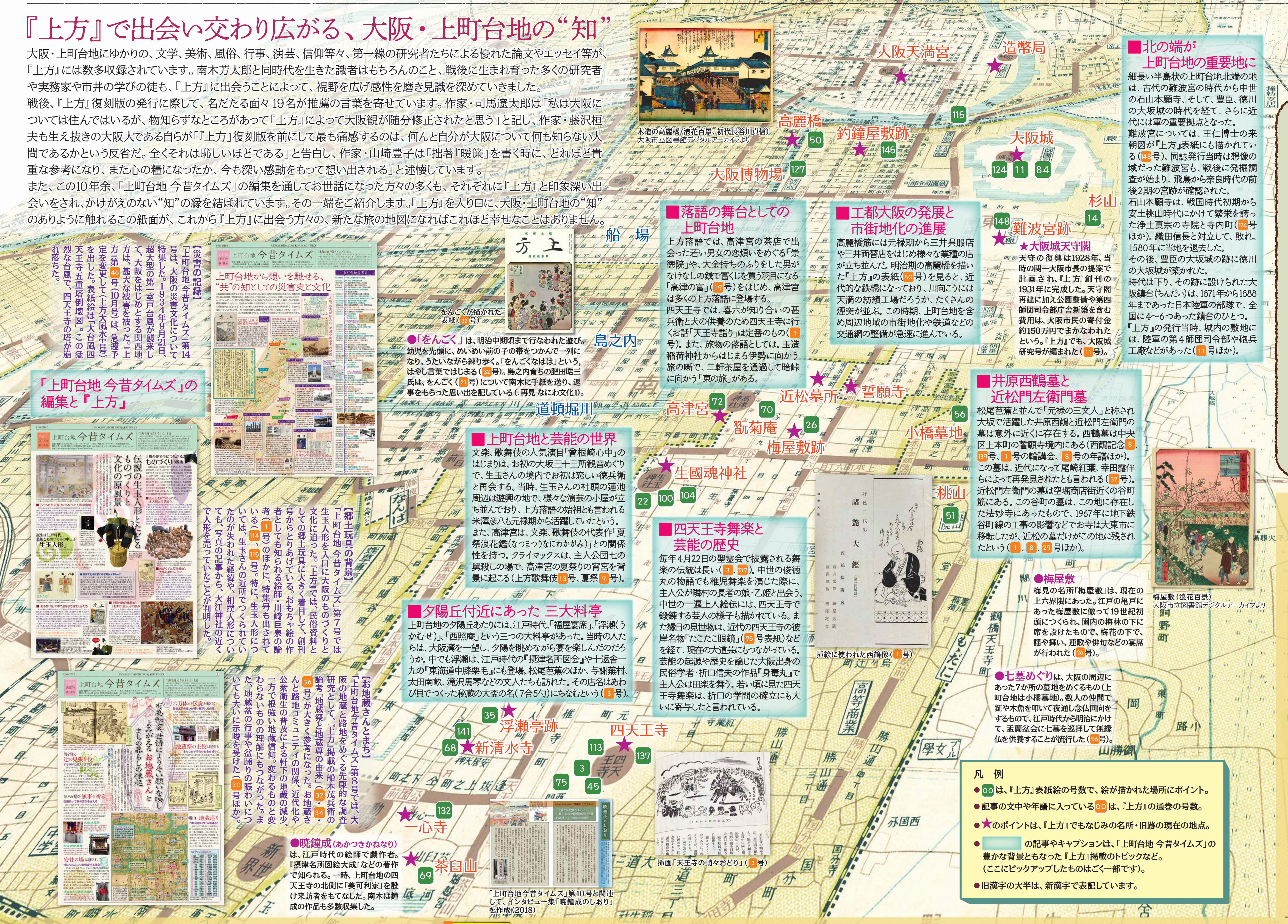
13号表紙の部分拡大

『上方』で出会い交わり広がる、大阪・上町台地の“知”

大阪・上町台地にゆかりの、文学、美術、風俗、行事、演芸、信仰等々、第一線の研究者たちによる優れた論文やエッセイ等が、『上方』には数多収録されています。南木芳太郎と同時代を生きた識者はもちろんのこと、戦後に生まれ育った多くの研究者や実務家や市井の学びの徒も、『上方』に出会うことによって、視野を広げ感性を磨き見識を深めていきました。

戦後、『上方』復刻版の発行に際して、名だたる面々19名が推薦の言葉を寄せています。作家・司馬遼太郎は「私は大阪については住んではいるが、物知らずなところがあって『上方』によって大阪観が随分修正されたと思う」と記し、作家・藤沢桓夫も生え抜きの大阪人である自らが「『上方』復刻版を前にして最も痛感するのは、何んと自分が大阪について何も知らない人間であるかという反省だ。全くそれは恥しいほどである」と告白し、作家・山崎豊子は「拙著『暖簾』を書く時に、どれほど貴重な参考になり、また心の糧になったか、今も深い感動をもって想い出される」と述懐しています。

また、この10年余、「上町台地 今昔タイムズ」の編集を通してお世話になった方々の多くも、それぞれに『上方』と印象深い出会いをされ、かけがえのない“知”の縁を結ばれています。その一端をご紹介します。『上方』を入り口に、大阪・上町台地の“知”のありように触れるこの紙面が、これから『上方』に出会う方々の、新たな旅の地図になればこれほど幸せなことはありません。



木造の高麗橋（浪花百景、初代長谷川貞信）
大阪市立図書館デジタルアーカイブより

「上町台地 今昔タイムズ」の編集と『上方』

【災害の記録】「上町台地 今昔タイムズ」第14号は、大阪の災害文化について特集した。1934年9月21日、超大型の第一室戸台風が襲来して、大阪をはじめとする関西地方は、甚大な被害を被った。『上方』第46号（10月号）は、急遽予定を変更して〈上方大風水害号〉を出した。表紙絵は「大台風四天王寺五重塔倒壊図」。この猛烈な台風で、四天王寺の塔が崩れ落ちた。

【郷土玩具の背景】「上町台地 今昔タイムズ」第7号では生玉人形を入口に大阪のものづくりと文化に迫った。『上方』では、民俗資料としての郷土玩具に大きく着目して、創刊号からとりあげている。おもちゃ絵の作者としても知られる絵師・川崎巨泉の論考（1号）のほかに、特集号も出されている（114、115号）。特に、生玉人形については、生玉さんの近所でつくられていたのが失われた経緯や、相撲人形についても、写真の記事から、大江神社の近くで人形を売っていたことが判明した。

【お地蔵さんとまち】「上町台地今昔タイムズ」第8号では、大阪の地蔵と路地をめぐる先駆的な調査研究として、『上方』掲載の船本茂兵衛の論考「地蔵祭と地蔵尊の由来」（32・34・36号）が大きく参考になった。お地蔵さんと路地コミュニティの関係、近代化や公衆衛生の普及による軒下の地蔵の減少、一方で根強い地蔵信仰。変わるものと変わらないものの理解にもつながった。また、地蔵盆の行事や盆踊りの賑わいについても大いに示唆を受けた（20号ほか）。

をんごくが描かれた表紙（32号）

●「をんごく」は、明治中期頃まで行なわれた遊び。幼児を先頭に、めいめい前の子の帯をつかんで一列になり、うたいながら練り歩く。「をんごくなはは」という、はやし言葉ではじまる（32号）。島之内育ちの肥田晧三氏は、をんごく（21号）について南木に手紙を送り、返事をもらった思い出を記している（『再見 なにわ文化』）。

■落語の舞台としての上町台地

上方落語では、高津宮の茶店で出会った若い男女の恋煩いをめぐる「崇徳院」や、大金持ちのふりをした男がなけなしの銭で富くじを買う羽目になる「高津の富」（19号）をはじめ、高津宮は多くの上方落語に登場する。

四天王寺では、喜六が知り合いの甚兵衛と犬の供養のため四天王寺に行くお話「天王寺詣り」は定番のもの（3号）。また、旅物の落語としては。玉造稲荷神社からはじまる伊勢に向かう旅の噺で、二軒茶屋を通過して暗峠に向かう「東の旅」がある。

■工都大阪の発展と市街地化の進展

高麗橋筋には元禄期から三井呉服店や三井両替店をはじめ様々な業種の店が立ち並んだ。明治期の高麗橋を描いた『上方』の表紙（50号）を見ると、近代的な鉄橋になっており、川向こうには天満の紡績工場だろうか、たくさんの煙突が並ぶ。この時期、上町台地を含め周辺地域の市街地化や鉄道などの交通網の整備が急速に進んでいる。

★大阪城天守閣

天守の復興は1928年、当時の関一大阪市長の提案で計画され、『上方』創刊の1931年に完成した。天守閣再建に加え公園整備や第四師団司令部庁舎新築を含む費用は、大阪市民の寄付金約150万円でまかなわれたという。『上方』でも、大阪城研究号が編まれた（11号）。

■上町台地と芸能の世界

文楽、歌舞伎の人気演目「曾根崎心中」のはじまりは、お初の大坂三十三所観音めぐりで、生玉さんの境内でお初は恋しい徳兵衛と再会する。当時、生玉さんの社頭の蓮池周辺は遊興の地で、様々な演芸の小屋が立ち並んでおり、上方落語の始祖とも言われる米澤彦八も元禄期から活躍していたという。

また、高津宮は、文楽、歌舞伎の代表作「夏祭浪花鑑（なつまつりなにわかがみ）」との関係性を持つ。クライマックスは、主人公団七の舅殺しの場で、高津宮の夏祭りの宵宮を背景に起こる（上方歌舞伎13号、夏祭7号）。

■夕陽丘付近にあった 三大料亭

上町台地の夕陽丘あたりには、江戸時代、「福屋宴席」、「浮瀬（うかむせ）」、「西照庵」という三つの大料亭があった。当時の人たちは、大阪湾を一望し、夕陽を眺めながら宴を楽しんだのだろうか。中でも浮瀬は、江戸時代の『摂津名所図会』や十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にも登場。松尾芭蕉のほか、与謝蕪村、太田南畝、滝沢馬琴などの文人たちも訪れた。その店名はあわび貝でつくった秘蔵の大盃の名（7合5勺）にちなむという（3号）。

■四天王寺舞楽と芸能の歴史

毎年4月22日の聖霊会で披露される舞楽の伝統は長い（3、137）。中世の俊徳丸の物語でも稚児舞楽を演じた際に、主人公が隣村の長者の娘・乙姫と出会う。中世の一遍上人絵伝には、四天王寺で鍛錬する芸人の様子も描かれている。また縁日の見世物は、近代の四天王寺の彼岸名物「たこたこ眼鏡」（75号表紙）などを経て、現在の大道芸にもつながっている。芸能の起源や歴史を論じた大阪出身の民俗学者・折口信夫の作品『身毒丸』で主人公は田楽を舞う。若い頃に見た四天王寺舞楽は、折口の学問の確立にも大いに寄与したと言われている。

挿画「天王寺の蛸々おどり」（3号）

「上町台地今昔タイムズ」第10号と関連して、インタビュー集「暁鐘成のしおり」を作成（2018）

●暁鐘成（あかつきかねなり）は、江戸時代の絵師で戯作者。『摂津名所図絵大成』などの著作で知られる。一時、上町台地の四天王寺の北側に「美可利家」を設け来訪者をもてなした。南木は鐘成の作品も多数収集した。

■井原西鶴墓と近松門左衛門墓

松尾芭蕉と並んで「元禄の三文人」と称された大坂で活躍した井原西鶴と近松門左衛門の墓は意外に近くに存在する。西鶴墓は中央区上本町の誓願寺境内にある（西鶴記念8、139号、1号の輪講会、8号の年譜ほか）。この墓は、近代になって尾崎紅葉、幸田露伴らによって再発見されたとも言われる（32号）。近松門左衛門の墓は空堀商店街近くの谷町筋にある。この谷町の墓は、この地に存在した法妙寺にあったもので、1967年に地下鉄谷町線の工事の影響などでお寺は大東市に移転したが、近松の墓だけがこの地に残されたという（1、8、29号ほか）。

挿絵に使われた西鶴像（1号）

梅屋敷（浪花百景）
大阪市立図書館デジタルアーカイブより

●梅屋敷

梅見の名所「梅屋敷」は、現在の上六界隈にあった。江戸の亀戸にあった梅屋敷に倣って19世紀初頭につくられ、園内の梅林の下に席を設けたもので、梅花の下で、謡や舞い、連歌や俳句などの宴席が行われた（26号）。

●七墓めぐりは、大阪の周辺にあった7か所の墓地をめぐるもの（上町台地は小橋墓地）。数人の仲間で鉦や木魚を叩いて夜通し念仏回向をするもので、江戸時代から明治にかけて、盂蘭盆会に七墓を巡拝して無縁仏を供養することが流行した（56号）。

凡 例

- ● 00 は、『上方』表紙絵の号数で、絵が描かれた場所にポイント。
- ●記事の文中や年譜に入っている 00 は、『上方』の通巻の号数。
- ●★のポイントは、『上方』でもなじみの名所・旧跡の現在の地点。
- ● ▨ の記事やキャプションは、「上町台地 今昔タイムズ」の豊かな背景ともなった『上方』掲載のトピックなど。（ここにピックアップしたものはごく一部です）。
- ●旧漢字の大半は、新漢字で表記しています。

その眺め、上町台地曼荼羅さながら『上方』に刻まれた、まちの相貌と魂を次代へ

■北の端が上町台地の重要地に

細長い半島状の上町台地北端の地は、古代の難波宮の時代から中世の石山本願寺、そして、豊臣、徳川の大坂城の時代を経て、さらに近代には軍の重要拠点となった。

難波宮については、王仁博士の来朝図が『上方』表紙にも描かれている（148号）。同誌発行当時は想像の域だった難波宮も、戦後に発掘調査が始まり、飛鳥から奈良時代の前後2期の宮跡が確認された。

石山本願寺は、戦国時代初期から安土桃山時代にかけて繁栄を誇った浄土真宗の寺院と寺内町（124号ほか）。織田信長と対立して、敗れ、1580年に当地を退去した。

その後、豊臣の大坂城の跡に徳川の大坂城が築かれた。

時代は下り、その跡に設けられた大阪鎮台（ちんだい）は、1871年から1888年まであった日本陸軍の部隊で、全国に4～6つあった鎮台のひとつ。『上方』の発行当時、城内の敷地には、陸軍の第4師団司令部や砲兵工廠などがあった（11号ほか）。

曾祖父・南木芳太郎の足跡をたどって

南木ドナルドヨシロウ（南木芳太郎曾孫）

南木贇良肖像（提供筆者）

■神官の家に生まれ、島之内界隈で育つ

南木芳太郎（1882-1945）の幼少期から青年期の経歴は一部不明な点があったが、父親の神官・南木贇良（あやよし 1848-1922）の略歴が記された『南木贇良翁年譜略』（1918・大正7年）、芳太郎と一緒に撮影された写真（1910・明治43年）、晩年の肖像画（肉筆掛軸）などが現存し、南木芳太郎の足跡も少しわかった。

4歳の時、生母・和世子が流産により亡くなる。5歳で南区公立御津小学校に入学、のちに島之内の育英高等小学校に進学するが、病弱で通えなくなり卒業できなかった。8歳頃、贇良の後妻・政が菓子製造小売業を開始、11歳の時、新屋敷（三津寺町二百四十七番屋敷の向い側）で鐵冷礦泉湯屋業を開始した。

■本屋の店員から、文学への関心も深まる

その後10代前半で放浪の旅に出たことは確かなようだが、一説では13歳で本屋の店員になったという。それから少しして長崎に渡り、のちに小説家となる平山蘆江（1882-1953）らと『半秋』という雑誌を出した。また20歳頃、東京神田の書店に住み込んで働いていたとされるが、口伝と『なにわ町人学者伝』（潮出版社 1983・昭和58年）に掲載された筒井之隆による記述（南木芳太郎の項）以外に資料がなく、断定できない。1910（明治43）年に船場の糸屋「志茂」の次女・志茂静と結婚したが、身分の差に加えて当時では珍しい恋愛結婚だったようだ。このころから、貴重な古典籍のコレクションが形成されていった。因みに静は再婚で、前夫は華族であったという。

■古典籍の南木コレクション形成と現存する目録

明治末から『上方』を創刊した1931（昭和6）年頃までに蒐集した書物のコレクションは『南木文庫蔵書目録』として1932（昭和7）年4月に東京の一誠堂書店より出版。所載された1185件の大半は劇文献や浄瑠璃本など孤本や珍本を含む演劇関係の和本だが、残念ながらほぼすべて1945（昭和20）年の戦災で消滅している。中身は失われたが、上記目録は南木芳太郎の趣味嗜好を推量できる貴重な文献と言えよう。

私が『上方』から得たもの

これまでの「上町台地 今昔タイムズ」にコメントをお寄せくださった有縁の方々に、以下の❶❷❸の設問について改めてお答えいただきました。

❶『郷土研究 上方』との馴れ初め（出会ったきっかけなど）についてお教えください。
❷『郷土研究 上方』全号の中で、最も心惹かれ・影響を受けた特集や記事等について、簡単にご紹介ください。
❸『郷土研究 上方』に掲載された、上町台地に関わる、記憶に残る特集や記事等がございましたら、ぜひご紹介ください。

南木コレクションと私と上町台地

◆北川 央 九度山・真田ミュージアム名誉館長（大阪城天守閣前館長）

❶私は1987年1月1日付で大阪城天守閣学芸員に採用され、2022年3月31日に大阪城天守閣館長を退任するまで、35年3ヶ月の長きにわたり、大阪城天守閣に勤務しました。大阪城天守閣は①豊臣時代歴史資料、③武器・武具参考資料、④城郭参考資料とともに、②大阪郷土歴史資料を4本の柱の一つとして博物館活動を行なっています。また、『郷土研究 上方』の編集・発行人であった南木芳太郎氏の収集にかかる近世～近代の大阪庶民の生活・庶民文化に関する一大資料群「南木コレクション」を収蔵しており、「南木コレクションシリーズ」と題した展覧会も定期的に開催しています。大阪城天守閣の学芸員として仕事をする上で、大阪の郷土史や文化・風俗・年中行事などを調べる際、『郷土研究 上方』は必要不可欠な文献でした。

❷私は大阪城天守閣に在勤中、1988年に開催した『南木コレクションシリーズ第8回 上方のちらし・引札展』を皮切りに、『〝上方〟への誘い―南木コレクション名品展―』『浪花百景―いま・むかし―』『浮世絵師 初代長谷川貞信が描いた幕末・明治の大阪―「水の都」の原風景―』など、大阪の郷土史にかかわる展覧会を都合10回、開催しました。中でも私は『浪花百景』『花暦浪花自慢』といった浮世絵や『摂津名所図会』『浪華の賑ひ』『淀川両岸一覧』などの名所図会、ちらし・引札の世界で活躍した浮世絵師・挿絵画家たちにたいへん関心を持つようになりました。そんな私にとって、第138号の「大阪明治挿繪畫家號」はたいへんありがたい特集号で、いろいろと勉強させていただきました。

南木コレクションのテーマ展から書籍を出版

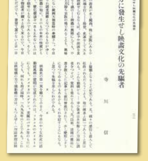
❸1988年に開催した『南木コレクションシリーズ第8回 上方のちらし・引札展』で「丹波屋九里丸」「さつま屋いも助」という二人の東西屋（ちんどん屋）のちらしを展示したことをきっかけに、東西屋に関心を持つようになり、「人気〝東西屋〟ライバル物語―丹波屋九里丸とさつま屋いも助―」という拙文をまとめました（拙著『大坂城と大坂・摂河泉地域の歴史』所収）。この拙文を執筆するにあたり、漫談家・花月亭九里丸さんが執筆された「〈明治の大阪風俗史（二）〉漫談 大阪が生んだ東西屋」（第2号）、「明治三軒長屋」（第6号）、「嫁入行列の東西屋」（第96号）がたいへん参考になりました。花月亭九里丸さんは東西屋「丹波屋九里丸」の息子さんで、「野漠（のばく）」と呼ばれた大阪市南区西賑町（現在の大阪市中央区谷町六丁目付近）の出身です。そういうと、花月亭九里丸の息子の渡辺さんから、拙文を読んだとお電話を頂戴し、お話しさせていただいたのも懐かしい思い出です。現代にちんどん文化を蘇らせた林幸治郎さん率いる東西屋（ちんどん通信社）が、東西屋「丹波屋九里丸」ゆかりのこの地域を拠点に活動を続けておられるのもうれしいことです。

特別展の図録

見せ物の伝統と映画黎明期の道頓堀と

◆武部好伸 作家・エッセイスト

❶2016年に上梓した『大阪「映画」事始め』（彩流社）の取材で、映画黎明期の事どもを調べるために手に取ったのが最初でした。以降、ときどき図書館で閲覧し、我が故郷・大阪の知らなかった面をいろいろ習得できました。
❷『初期の道頓堀活動写真』（22号）、『上方に発生せし映画文化の先駆者』（23号）、『最初の戦争映画と山中翁』（101号）などが非常に参考になりました。映画史は東京中心なので、大阪から見据えた視点に刺激を覚えました。
❸『天王寺と見世物』（3号）、『上町より南大阪』（50号）と『北上町より城北へ』（同）、『生國魂神社』（55号）などが印象に残っています。古き良き時代の上町台地の情景がまざまざと浮かんできました。



郷土玩具に見られる民俗学的な系譜も

◆田野 登 大阪民俗学研究会代表

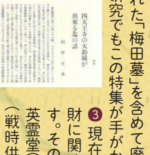
❶名著出版から「都会の地蔵さんのフォークロア」の1年間12回連載を頼まれ執筆を開始したのは、1988年1月のこと。1933年の高津・日本橋の路傍の地蔵尊の異名から祭祀組織、祈願内容、由来に及ぶ悉皆調査（第32・34・36号）を多く引用した。
❷「郷土玩具号」（114号 1940・6）、「続郷土玩具号」（115号 1940・7）には、社寺の頒布する縁起物を挙げ、「現代民俗学」がとりあげている民俗の再生・創成・フォークロリスムスを読み取ることができる。
❸「天王寺研究号」（3号 1931・3）には、四天王寺周辺の歴史・民俗・名所等を隈なく取り上げ、一柳安次郎「天王寺詣の思出」に見える「ヤマ行き」なる語からは上町台地を軸にその周縁部一帯が大阪人にとっての聖なる空間だったと分かる。

郷土玩具の記事は何度も掲載（3号）

現代の発掘事例につながる内容も豊富

◆佐藤 隆 大阪市教育委員会事務局総務部文化財保護課 主任学芸員

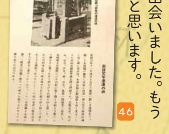
❶大阪歴史博物館に勤務していた頃に、職場の書棚に並んでいた復刻版を手に取ったのが初めてだったかと。「阿弥陀池」に関する原稿（「おおさかの名所阿弥陀池の構造とその歴史」：『大阪の歴史と文化財』第15号2005年）に引用しました（第83号）。
❷第56号の「七墓めぐり」の特集は、「大坂七墓」のまとまった解説として現在でも重要な基本文献です。「南濱墓」「蒲生墓」以外は、一部が発掘調査された「梅田墓」を含めて廃絶しており、正確な場所の推定やその他の研究でもこの特集が手がかりとなります。
❸現在、大阪市指定となっている文化財に関連する記事がいくつか見られます。そのうち近年の事例では、「四天王寺英霊堂（旧鐘楼）に吊られた巨大な梵鐘（戦時供出により現存せず）についての詳細な記事があります（第94・145号）。



過去の災害とともに五重塔崩壊の詳報も伝える

◆飯田直樹 大阪歴史博物館学芸員

❶明治期大阪の卒業論文を準備している時期に出会いました。もう30年以上前のことで、場所は中之島図書館であったと思います。
❷大阪城天守閣の南木コレクションの中に、石碑「大地震両川口津波記」の碑文を印刷した一枚物があり、裏に貼られるメモから碑文作者が大行寺信暁とわかりました。メモは南木芳太郎が書いたのではないかと思い、『上方』を調べると、第46号に石碑が紹介されていました。
❸強いてあげるとすれば、質問2で答えた第46号（上方大風水害号）です。この号は、昭和9年の室戸台風による被害に関するもので、四天王寺の五重塔崩壊などが詳しく記されています。



四天王寺さんの奥深さと「落語 天王寺詣り」

◆足代健二郎 猪飼野探訪会 代表

❶第3号【天王寺研究号】。「天王寺七宮」や、南大門脇の「天王寺十五社」のことを知り、それらの神社に興味を持った。
○「天王寺十五社」に関しては、のちに『都島神社 平成大改修記念誌』掲載の拙文で詳述した。
○『落語天王寺詣り』収録は貴重である。
❷第3号掲載、笑福亭枝鶴『落語天王寺詣り』。抜粋←
「（石の鳥居）柱の根元を見い、石の出しゃばってある所が三つある。蛙が彫ってあったのや。時代がついて馴れて終うたんや。上が箕で下が蛙。上から下へ身い返る」「私がここでびっくり返る」

「天王寺研究号」との関わりと肥田先生の教え

◆高橋俊郎 元大阪市立中央図書館副館長・オダサク倶楽部代表

❶50年前の大阪市立図書館に勤め始めた最初に、郷土資料で重要な雑誌として教えられました。市内各地への文学散歩の際にも、歴史事項の参照に活用していました。新和出版社の復刻版をよく使用しました。雑誌『大阪春秋』の編集に一部携わったのも、『郷土研究 上方』の幅広く興味の尽きない編集方針にあこがれたからでもあります。
❷肥田晧三先生は『郷土研究 上方』の記事内容について、空で何でも答えていらしたので、その記憶力には常に驚愕していました。ある時、懐から「別巻総目次・索引」の縮刷版を取り出されたので、納得がいきました。先生は常に「別巻総目次・索引」を携帯して、引かれていたのだと思います。先生の知識の源の一つが『郷土研究 上方』であることを知って、私もよく目を通すようになりました。
❸天王寺図書館長として赴任した折に、「第1巻第3号天王寺研究号」を詳しく閲覧しました。天王寺区に関する郷土研究書は数ありますが、この「天王寺研究号」は常に読み返していました。四天王寺さんの「蛸々眼鏡」や生國魂神社の「生玉人形」などについても、この「天王寺研究号」から知識を得ました。執筆陣の多様性が、記事内容の多様化を果たしていると考えます。

当時の重厚な執筆陣と広範な内容に感嘆

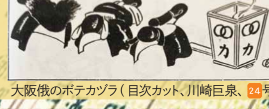
◆明尾圭造 大阪商業大学教授

❶高校生の頃、中之島図書館で復刻版を見たのが最初だったと思います。夏休みの課題を放ったらかして読んだものです。その後、古書店や即売会で貞信の木版表紙を目当てに元版を買いました。重厚な執筆陣と広範囲の内容はいまだに調査研究の拠り所となっています。
❷「大阪明治文化号」（25号）は最初に買った『上方』でした。巻頭図版で紹介された南地五花街の名妓に心惹かれたのと、発行人南木芳太郎の序文も気合が入ったもので、それは執筆陣の豪華さにも反映されていました。明治大阪の思い出を記した幸田成友や村島帰之の明治末期の観覧場紹介が特に記憶に残っています。

昭和初期の「俄」の様子が知られる貴重な資料

◆藤田富美恵 童話作家

❶大阪の代表的な庶民娯楽であったのに、今では知る人がほとんどなくなってしまった「俄（にわか）」。ちょっと残念に思い書き残したいと思いはじめた時、『郷土研究 上方』に出会い読みはじめました。
❷大阪の漫才・落語・喜劇の源流とも言える「俄」の衰退は父（秋田實）も気になっていたようで、コラム等に「俄」のことを連載。それらを読後、『上方』で読んだ「大阪二〇加の思ひ出（19号）」「俄の舞台写真（26号）」等は、昭和初期の俄の様子がとてもよくわかり嬉しい出会いでした。
❸高津神社の近くにあった梅の名所「梅屋敷」が『上方（26号）』の表紙に。また同誌には「梅屋敷」の説明も。古来より浪花の土地は梅と深い縁が結ばれているそうで、この記事に出会って以来、毎年2月になると高津神社の梅を見にいくのが楽しみです。

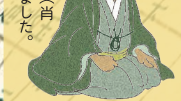


大阪俄のボテカヅラ（目次カット、川崎巨泉、24号）

「かみがた」が大好きで、憧れの郷土史家になった夫

◆肥田美知子

亡夫肥田晧三の思い出を申し上げます。
❶子供の頃、家に『上方』がありました。表紙の貞信さんの絵が何とも言えず好きでした。かみがた、だけは読めました。「かみがた」て何やと言う訳です。祖父に「郷土史家になりたい」と言った所「郷土史家は職業やないで」と諭されました。が、晩年になって「とうとう郷土史家になったなぁ」と良く申していました。
❷南木さんには良き大阪の復活と興隆という意志があったようです。南木さんが企画実行した催し事（『上方』行事）も重要でした。主人も常に前向きで、昔の大阪が良かったとは一度も言った事がありませんでした。
❸先年、大阪歴史博物館で、松川半山画・花屋庵鼎左賛、暁鐘成の肖像画が修復記念に展観されました。主人は『上方』の人達はこれを知らなかったんやなァ、知ったら大騒ぎになったやろうと感無量でした。いち早く「今昔タイムズ10号」で鐘成のイラストを掲載されたのを（肖像画に）すぐに気が付いて、えらいなァと感心していました。



暁鐘成の肖像から描いたイラスト

背景地図：遠近、イロハ大阪市街図（1926年）

今こそ、再び『上方』を携えて、未来を駆けよう

その眺め、上町台地曼荼羅さながら『上方』に刻まれた、まちの相貌と魂を次代へ

戦争で失われた大阪を中心とする上方の風景や生活文化全般を、多分野の研究者たちによって詳細に記録に留めた『上方』の史料価値は極めて高いものです。戦後散逸し入手困難な状況にあった同誌は、多くの識者たちに熱望され、心ある版元・新和出版社によって、1969（昭和44）年〜1970（昭和45）年にかけて、郷土史料（復刻版）『上方』全11巻の姿で全号を収録して蘇り、将来に手渡されました。折しも時代は、戦後の大阪・関西が大きく変貌を遂げた、1970 年大阪万博を迎えていました。今、2025年大阪・関西万博が目前に迫るなか、改めて『上方』のバトンを未来の走者へと願っています。

『郷土研究 上方』年譜

00は、通巻の号数。00は、表紙絵が上町台地に関係する号数。内面のマップに場所をプロット。

1931（昭和6）年1月 南木芳太郎（数え50歳）によって月刊誌として発行はじまる。主に大阪の文学、美術、風俗、行事、演芸、信仰、伝説、娯楽、里謡などが取り上げられており。次の特集が編まれた。1創刊号、3天王寺研究号、7夏祭号、8西鶴記念号、10千日前今昔号、11大阪城研究号 ／9月 満州事変勃発

1932年 13上方歌舞伎号、14大阪町人号、16上方俳星号、20上方盆踊号、22道頓堀変遷号

1933年 25大阪明治文化号、26続大阪明治文化号、28上方遊郭号、29上方郊外号、33上方怪談号、35大阪商工発達号、36歳末号

1934年 37上方郷土芸術号、39大楠公研究号、43上方水涼号、45上田秋成号、46大風水害号、47上方敵討号 ／9月 室戸台風襲来

1935年 49幕末維新号、50大阪今昔図絵、51続大阪今昔図絵、52上方舞踊号、54淡路郷土号、55大阪神社号、56大阪探墓号、59尼崎号、60上方忠孝号

1936年 61上方新年号、63阿波特輯号、66西行追慕号、69自慢号、71北摂研究号、72続北摂研究号

1937年 73上方長寿号、74鴈治郎追悼号、77魚島号、78北畠顕家号、79淀川号、80銷夏号、81日清戦争時代号、82続日清戦争時代号 ／7月 日中戦争が全面化

1938年 85維新勤皇号、86河内研究号、87続河内研究号、88上方桜花号、89続上方桜花号、91上方行脚号、92鬼貫追悼号、93八幡男山号、95冠婚葬祭号、96続冠婚葬祭号 ／国家総動員法

「上方」第100号掲載の写真。1902（明治35）年1月、関西文学同好新年会に集った面々。若き河井酔茗や与謝野鉄幹らの姿も。前列左から二人目が21歳の南木芳太郎。

1939年 97上方義民号、98郷土芸術追憶号、100第百記念号、102上方染織号、103水無瀬神宮号104名家追憶号、105堂島号、107後醍醐天皇聖跡号、108赤穂義士号

1940年 109上方女性鑑、110神武天皇御聖跡号、111西行景仰号、112伊勢参宮号、113五重宝塔落慶号、114郷土玩具号、115続郷土玩具号、117尊皇と先覚号、118三島号 ／表紙絵作者の二代目長谷川貞信が死去、小信が三代目を継ぐ

1941年 121文楽号、122住吉号、124石山本願寺号、125続文楽号、126天忠組研究号、127水の随筆集、128続水の随筆集、129紀海音号、130和泉研究号、131続和泉研究号、132大阪掃苔号 ／12月 日米開戦

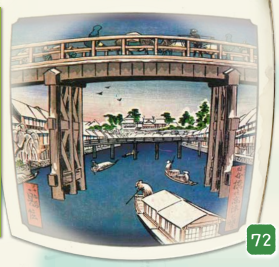
1942年 133上方維新海防号、135文房四宝号、136南方進出号、137芸能文化号、138大阪明治挿絵画家号、139西鶴記念号、140船舶今昔号、142阪神号、143続阪神号

1943年 144芸能文化号、145梵鐘号、146蒹葭堂号、147上方方言号、148郷土勤皇先賢号、149上方大衆娯楽号、150芭蕉記念号

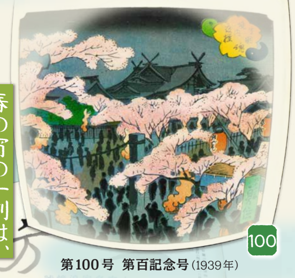
1944（昭和19）年 151上方心学号 4月で休刊

1945（昭和20）年10月 南木芳太郎死去（享年64歳） ／8月 戦争終結

1969（昭和44）〜70（昭和45）年 復刻版が新和出版社から刊行
※翌年に別巻・索引を刊行



まちの橋上から見えた上町台地の神社
日本橋より高津を望む雪景／貞信
第72号 続北摂研究号（1936年）



春の宵の一刻は、まさに値千金
生國魂の夜櫻／貞信
第100号 第百記念号（1939年）

池の周囲は芸能で賑う遊楽地
生玉淨瑠璃神社蓮池の圖／貞信
第104号 名家追憶号（1939年）

雪夜、市民の寄付で、再建なった天守閣
大阪城天守閣雪景／貞信
第84号（1937年）

四天王寺参りのときは、楽しみだった大道芸
四天王寺彼岸會たこたこの圖／貞信
第75号（1937年）

大災害からの復興のシンボル
落慶の四天王寺五重塔／貞信
第113号 五重宝塔落慶号（1940年）

近代大阪の足音も上町台地から
雨中旧博物場表門之圖／貞信

壮観！船渡御、水都の夏祭を彩る
天神祭お迎人形／貞信（二代目絶筆）
第115号 続郷土玩具号（1940年）

謎に包まれた中世の宗教都市
石山本願寺門前町之圖／貞信
第124号 石山本願寺号（1941年）

第127号 水の随筆集（1941年）

大阪の台地にもあった清水の舞台
新清水舞台の秋月／貞信
第141号（1942年）

幕府の租税の免除でつくられた時の鐘
釣鐘屋敷之圖／貞信
第145号 梵鐘号（1943年）

「さくやこのはな」と当地を言祝いだ
王仁來朝の圖／貞信

古代から連綿とつながる芸能絵巻
四天王寺聖靈會舞樂／貞信
第137号 芸能文化号（1942年）

第148号 郷土勤皇先賢号（1943年）

歴史に残る人々が眠るお墓を訪ねて
天王寺一心寺境内／貞信
第132号 大阪掃苔号（1941年）

肥田晧三氏（1930-2021、関西大学元教授）は『上方』について、「その全冊の充実した内容は大阪郷土史研究の金字塔ともいうべき超一級の重要文献、大阪のことを調べようとする者はこの貴重な資料の宝庫から、ひとしく量り知れぬ大きな大きな恩恵をうけてきたのである」（『南木芳太郎日記』第1巻「解題 南木芳太郎氏の前半生」）と評しています。ちなみに「上町台地 今昔タイムズ」第13号のコメント内で、肥田先生ご自身がいかに『上方』を愛し、その通読によって救われたのかを述懐しています。

南木日記との出会いと郷土研究のバトン

古川武志（元大阪市史料調査会調査員）

私が『郷土研究 上方』を参考するようになったのは、大阪市史料調査会で調査員をはじめた頃のこと。ちょうど今から30年前でした。大阪歴史学会という研究会で、戦前の郷土史編纂をテーマに学会報告をする機会を得ました。当時、私は泉佐野市出身の郷土史家池田谷久吉（いけだや・ひさきち）という人物に興味を持ち、彼の郷土研究活動と地域へのアプローチについて、大学院に提出する論文をまとめたことがありました。その流れで学会報告を行い、『上方』の「和泉特集号」の正続を食い入るように読んだものでした。さらにその大会報告に来られていた恩師の原田敬一先生から、神戸の古本屋で南木芳太郎氏の日記が出ている旨をうかがい、大阪市史編纂所の予算で購入したのです。

大阪市史編纂所刊行の『南木芳太郎日記』（第5巻、2022年）

日記は1914（大正3）年から南木さんが亡くなる前年の1944（昭和19）年までの14冊。

当時編纂所では内容の重要性からも鑑みて『大阪市史史料』として刊行することとなりました。早速、日記の翻刻作業と登場人物など内容の確認作業を進めましたが、これが実に大変な作業でした。日記の人物は『上方』の著者や人名録には登場するものの、人名辞典には掲載されていない人ばかりで、まさに暗中模索の作業。そんな中で日記に登場する人物で、ご存命者であったのが肥田晧三先生でした。先生に日記の翻刻編纂にご協力を仰いだところ、ご快諾をいただいたのでした。先生は幼い頃から南木氏を心から尊敬し、『上方』を座右の書としておられたので、お互いに水を得た魚のようでした。先生に不明な点をおうかがいしながら作業を進め、2巻にわたって解題の執筆もしていただきました。

南木芳太郎とその周辺
上方文化の小縮図を記録に留めて
古川武志

古川氏による南木芳太郎の評伝（「大阪人」2004年7〜12月）

先年、大阪市史編纂所より『南木芳太郎日記―大阪郷土研究の先覚者（パイオニア）―』全5巻が無事完結できたのは、ひとえに先生のお力に依るところが大きかったのです。

大阪市が第2次市域拡張により「大大阪」へと変貌を遂げる時代、南木氏は自らの資材と時間をなげうって旧き良き大阪文化の保存・継承（顕彰）のため、この大事業を進められたのです。

この『上方』により、わたしたちはすでに潰えてしまった大阪の諸相の一端を垣間見ることができるのです。政治・経済・文化、それも古代から（当時の）現代まで、様々なジャンルの専門家が南木氏の依頼に応え執筆したのは実に崇高なことであり、氏のお人柄の賜物といっても過言ではないでしょ-う。

前述の『南木芳太郎日記』の解題で、私は南木氏からの「郷土研究」というバトンを託されたのが、肥田先生であったと述べました。不世出にして大阪そのものの体現者であるお二人のバトンを引き継ぐのはいかなる人物であるのでしょうか。

肥田先生の著書『再見なにわ文化』（2019年）

謝辞：10年余に渡り、「上町台地 今昔タイムズ」の制作にご協力を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。バックナンバーは、大阪ガスネットワーク CEL／U-CoRoホームページの検索にてご覧いただけますので、ご活用賜りましたら幸いです。